日本における第一次大戦から第二次大戦勃発に至る女子青年団とその雑誌の変遷

神　田　より子

はじめに

本論では第一次大戦を境に生じた女子青年団の前史となる処女会の成立から、第二次大戦勃発の1941（昭和16）年の大日本青少年団成立に至るまでの変遷と、その雑誌の成立過程を中心に述べてゆく。そのためにこの間に発行された女子青年向けの雑誌『処女の友』及び『女子青年』そして『青年（女子版）』の経緯をたどる。それを踏まえて雑誌の中で女子青年がどのように表象されてきたのかを検証する。

『処女の友』や『女子青年』の読者は、中等教育を受けていない農村の未婚の女性である。後述するように、農村部の未婚の女性のための組織は、青年のために作られた組織に続くものとして後追いの形をとった。さらに後述するように、都市新中間層の未婚の女性たちとはその環境が全く異なっていた事に注意を払う必要があるだろう。

21世紀になって出版された『農村ジェンダー』(1)に「やはり、農山漁村には独自のジェンダー問題が存在するのである」と言うことばが前書きに載っている。こう言わしめるほどの状況が農村にはつい最近まで残っていたのだ。そうしたことを前提として本論を進めてゆくことにしたい。

そこで女子青年団前史となる処女会の動向、処女会から女子青年団へ、さらに大日本連合青年団への移行に伴い、大日本連合女子青年団発足、そして大日本青少年団が結成され、すべての青少年団体がその中に組み込まれ、第二次大戦末期の戦時教育令により、大日本青年団が解散し、学徒隊へと組み入れられてゆく。本論では第二次大戦勃発までの過程を検証する。その上で雑誌『処女会』『女子青年』『青年（女子版）』を通観し、その特徴を述べてゆくこととしたい。

第１章　青年団活動の沿革と雑誌の変遷

⑴　青年団活動の沿革

はじめに青年団活動の沿革(2)を述べてゆく。1869（明治２）年に青年夜学校が生まれた。1894（明治25）年には、青年集団を青年会などと呼ぶようになる。1915（大正４）年に、青年団体設置に関する訓令が内務・文部両省の共同により出され、女子の団体

も含めた青年団体設立の趣旨が、修養団体であることが明確化される。

こうして1916年に、はじめて処女会中央部設立の第１回相談会が開催され[3]、1919年には処女会中央部発会式があり、機関誌『処女の友』が創刊される[4]。1924年には大日本連合青年団が結成される。そして1925年には大正天皇御結婚満25年の祝典に際し、男女青年団事業奨励のため、金75万円が下賜され、日本青年館の竣工を見る[5]。1925年になると、内務・文部両省より女子青年団体に関する訓令が出され、全国に小学校通学区域等を単位に、女子青年としての修養団体組織化が進められた。当時の女子青年団体の多くは「処女会」の名称を使っていた。

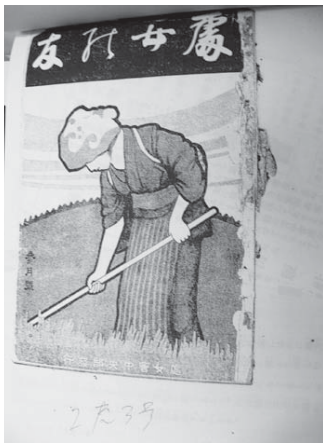
1927（昭和２）年には東京で大日本連合青年団の発団式が行なわれ、男子青年団・女子青年団に発展する。そしてこれまでの処女会中央部は解散し、大日本連合女子青年団の発団式が行われる[6]。

「支那事変」（1937）が勃発した後、1939年になると、大日本連合青年団は大日本青年団に改称される。そして1941年１月、大日本青年団は解散し、大日本青少年団が結成される[7]。このときの団長は文部大臣で、団章、帽章、団歌などが制定される。この団体は大日本青年団、大日本連合女子青年団、大日本少年連盟（後のボーイスカウト）、帝国少年団協会が統合されたもので、1500万人を抱えた単一団体となる。この後第二次世界大戦中の1943年には大東亜青年総決起運動の展開が見られる。そして1945年に戦時教育令より、大日本青少年団は解散し、学徒隊に組み入れられた。

⑵　女子の雑誌の成立事情とその変遷

以下では前章の青年団の状況をふまえて、その機関誌である『処女の友』『女子青年』『女性往来』『青年（女子版）』[8]と、雑誌の変遷[9]を見てみよう。

大正時代に出版された
雑誌『処女の友』
1919年新年号



雑誌『処女の友』
1919年３月号

雑誌『処女の友』
第７巻第７号

処女会中央部発行の雑誌『処女の友』は長期にわたり発行されていた。大正末期から昭和にかけて処女会から連合女子青年団へと発展的に改称し、昭和15年に各青年団が統合されて、大日本青少年団が結成された1941（昭和16）年までの期間に、『処女の友』と併存する形で『女子青年』『女子青年会』『女性往来』が発行されていた。以下ではこのあたりの状況を見てゆくことにしたい。

1928（昭和３）年の『処女の友』によると、1918年12月25日に第３種郵便物の認可を受けているが、第１巻発行は11月10日である[10]。1931（昭和６）年には、印刷部数20万部だった。

1926年、処女会中央部からの発行部数は700部程度で、経営困難となり、財団法人社会教育協会に委譲された。

1927年４月、処女会中央部が解体し、大日本連合女子青年団が設立宣言をする。機関誌は社会教育協議会が『処女の友』の発行・経営に当たる。

1928年の『処女の友』は、菊版90頁前後で、地方版をつけると102頁、写真４頁もある。定価は１部20銭だったが、やがて15銭に引き下げた。この頃には「処女会」と「女子青年団」とが並立し、郡や市町村の連合体結成の発会式報告がされている。

雑誌『青年(女子版)』1944年新年号
宮本三郎絵「戦闘配置につけ」

1930年12月に『女子青年』（新聞形式）が発行され、全国の単位団に無料配布されたが、1932年６月に８頁に増刷し、33年、大日本連合婦人会との共同事業として『女性往来』と改題し、やがて四六倍版24頁の雑誌として、女子青年団、女子の専門学校、高等女学校、婦人会に無料配布された。

1939（昭和14）年４月10日、新たに『女子青年』（80頁）を創刊５月号として刊行され始めた。これは女子青年団幹部団員が対象だったが、『処女の友』と両立することになる。創刊５月号は５万部、６月号は７万部と称されている。

雑誌『青年（女子版）』1944年９月号
伊勢正義絵「断じて皇土を護らん」

『女子青年』『処女の友』は、41年１月号限りで廃止し、大日本連合女子青年団の機関誌として『女子青年』が生まれたが、発行は依然として社会教育協会だった。

本部発行の『女子青年』誌は不振だった。この『女子青年』（公称20万部）が、青年団統合の

際、青年館に移り『青年（女子版）』として、1941年10月号より発行（部数は10万部）されるようになる。

統合に際して、『女子青年』は1941（昭和16）年９月に、財団法人社会教育協会から、青年館に有償移譲された。

第２章　青年団組織の沿革と変遷

⑴　処女会中央部の成立

以下では女子青年団成立以前の、成年女子の位置づけとその組織化の経緯を、渡邊洋子の『近代日本女子社会教育史－処女会の全国組織化と指導思想－』からたどってみることにしたい。

渡邊は教育史の観点から、国家は「学制」発布当初から、女子に対し、男子と同じ水準の教育を与える必要を認識していなかった[11]事、女子の就学率は、1897（明治30）年頃から急上昇するが、教育政策は「良妻賢母主義」の枠を出なかった事、非就学女子の位置づけが自覚されなかった事、とくに近代日本の女子教育の基本理念となった良妻賢母主義が、働かなくては生きてゆけない階層の大多数の女子にも求められた事、中等教育に進むことのなかった地方農村女子は全く考慮されていなかった事、女子の社会教育は研究対象として充分な位置づけをされなかった事を指摘した[12]。

これらをふまえて、女性と青年の両カテゴリーの狭間に位置する青年女子の組織化の問題を取り上げてゆく。

再び渡邊の論から見てゆこう。処女会設立の動向と背景についてその政治的な位置づけから見てみると、1917（大正６）年、内務省社会局が女子団体の全国調査を行ない、1921年６月に調査報告書『全国処女会・婦人会の概況』が刊行された。ここから、青年女子のみを対象として成立した団体、婦人組織から分離・独立してできた組織体を「処女会」として定義できる。

内務省地方局委託の天野藤雄が「農村処女会」に言及し、日本初の女性の労働組合、友愛会婦人部が設立された1916年10月以降、処女会中央部設立の準備を開始した。著名な女子教育家に協力を要請し、山脇房子、鳩山春子、三輪田真佐子、下田歌子、跡見花渓、棚橋絢子、嘉悦孝子、吉岡弥生などが理事となった。

1918（大正７）年７月、処女会中央部発会式が催され、内務大臣後藤新平、文部大臣岡田良平、大学教授の新渡戸稲造などが出席した。こうして1919（大正８）年11月に機関誌「処女の友」が誕生し、処女会活動の事例紹介、社会的意義の発揮及び権威付け、女工問題、都市問題、東京案内、職業紹介等が取り上げられた。

1920年代になると、処女会を青年団と並ぶ女子青年団として再編しようとの意図が、

皇室の関与という形で明白になる。1921年５月、大正天皇成婚満25年の祝典に際し、「男女青年団体事業御恩奨励」「御内幣金」として75万円が御下賜された。これを機に、道府県はその利子を男女青年団の事業助成に充てることにした。これを受けて「男女青年団事業」の名で規定し、処女会から女子青年団へという青年女子団体の制度的・質的転換の可能性が地方レベルでも看取され、その準備が進められてきた[13]。

⑵　大日本連合女子青年団の成立と変遷

以下では処女会から発展した女子青年団の成立、及び変遷の背景を見てゆきたい。そこで『大日本青少年団史』の編纂事業に関わった日本青年館の『採訪』録[14]からその事情を見てゆくことにする。

前章で見てきたように、大正初期、男子青年団の発足より若干遅れて処女会が全国各地に生まれた。1926年11月、内務・文部両省の訓令「女子青年団体ノ指導誘掖ニ関スル件」、文部次官通牒「女子青年団体施設要項」が発せられ、性格、区域、年齢等が規定された。こうして1927（昭和２）年４月、処女会中央部が発展する形で、大日本連合女子青年団の創立が宣言され、10月10日、全国女子青年代表が日本青年館に集まり発団式が挙行された。

前述した渡邊は、青年女子団体を「女子の修養機関」と規定し、「良妻賢母」概念に抵触することなく、「国民」「公民」としての使命を女子に担わせた。この後、女子青年団の指導方針は「国民」「公民」と「良妻賢母」との側面を兼ね備え、両者の間の矛盾・葛藤を内包しつつ展開したと指摘している[15]。

1928年５月号『処女の友』によると、同年行われた第１回理事会では、この年の予算として、11,980円を計上、事業計画として、11月の御即位の大礼を記念して、京都で「全国女子青年大会」、「講習会」の開催、「団報」の発行、団旗の調整、「団歌」の制定、パンフレットの発行、講師の派遣などを決めた。

同12月号には、５月の理事会で「女子青年団歌の募集」「女子青年団大会」「団旗調整」「会館建設に関する件」が付議された。御即位の大礼を期して行う第２回大会は、11月21日から３日間で、加盟団体の内25歳未満の女子会員300名を集めた。団歌は、11月号によると鍛冶千代子の作が入選決定され、作曲は岡野貞一だった。団旗は12月号に写真版で掲載された。団旗の柄には撫子の花の中心に「女青」の文字がある。

女子青年団（単位団）の事業の傾向は次の通りである。

編み物講習会、軍艦見学、敬老会、雑巾の配布、活動写真会の開催、兵営の見学、賃仕事で基本金の造成、青年訓練所の炊き出し、銀指輪を団員章とする、消防隊、赤ちゃんの祝い着を贈る、うどん競技、手芸品展覧会、炊事講習会、料理講習会、母校

の労働奉仕、お花のけいこ、村道の掃除、軍人遺族家族慰問と手伝い。本部では指導者の講習会も行っている。

1935年７月、女子会館が芝公園に完成し、中央機関「大日本連合女子青年団」の本部ができた。初代理事長は山脇房子、２代目理事長は吉岡弥生だった。

⑶　大日本青少年団と青年女子

この大日本連合女子青年団が、やがて第二次大戦へと進んでゆく非常事態に伴い、大日本青少年団へと統合されてゆく。以下では『大日本青少年団史』から、その過程を追ってゆくことにしたい。

１　大日本青少年団への統合

1940（昭和15）年9月16日、文部省社会教育局より、青少年団体を統合する「大日本青年団組織試案」が発表され、文部大臣は、閣議に報告した。その理由は「未曽有の非常時局下高度国防国家体制の確立の要請に即応して、我が国青少年の教養訓練を一層強化」することにあった。

17日には文部大臣に対して「大日本青少年団組織試案」を提出、1941年１月16日には「大日本青少年団則」が施行された。これによると、名称は大日本青少年団、目的は皇国の道に則り男女青少年に対し団体的実戦鍛錬を施し、共励切磋確固不抜の国民的性格を錬成して、負荷の大任を全うすることにある。団長には文部大臣が当たり、団を統括すること、経費は国庫補助金などを充てることとある。

同日施行された地方団則によると、単位団は道府県、郡市区、町村の青少年団とする。団長は地方長官が当たる。道府県の事務局には総務部、青年部、女子部、少年部を置く。単位団は青年団、女子青年団、少年団とする。青年団及び女子青年団は公立青年学校の通学区を標準として設置する。団長は青年学校長の職にある者とする。単位団の団員は、青年学校生徒及び14歳から20歳までの男子青年は青年団普通団員、幹部または指導者として加入する21歳から25歳の男子青年は幹部団員、青年学校生徒及び14歳から25歳までの未婚の女子青年は女子青年団員、国民学校初等科３年以上の国民学校児童は少年団として区分する。これらは学生生徒と勤労青少年の差別撤去による全青少年を対象とした組織化への動きとなった。

単位団の年齢構成を見てみると、青年団は14歳から21歳、女子は14歳から25歳と違いが見えてくる。この４歳の違いは、21歳から25歳の男子は、幹部団員とされるところから来るもので、女子団員にこの規定はない。当時、青年学校が男子には必修であったこと、女子はそうではなかったことなどによる教育レベルの差がこのような差違に

よっても表されてくるのであろう。

上記事務局内に設置された女子部は、訓練や指導に関わる指導課、家庭管理や女子青年の技能や職業指導に当たる生活課、結婚や育児・看護・衛生に関する厚生課の３課からなっていた。

大日本青少年団に統合した四つの青少年団体の団体数及び団員数の内訳は以下の通りである。

青年団	単位団数	１７，９９１	団員数	２，２４５，１２０
女子青年団		１５，４９２		１，５７３，８７７
合計		３３，４８３		３，８１８，９９７
少年団連盟		１，４４６		１３９，１４７
少年団協会		１，３７０		５６５，８８３
合計		２，８１６		７０５，０３０

２　大日本青少年団の活動状況

ここでは大日本青少年団の主な活動状況を見てゆこう。

①　大日本青少年団が結成されてから最初の全国的組織で展開したのは、食糧飼料増産運動だった。この運動と連動させて、新生青少年団の組織の充実を図った。その一例として、宮城県団で実施している「青年稲作増収競技」に関する資料を地方団に配布した。これは農耕に従事する県下の全男女青年が参加して、耕種改善基準田について増収を目的とした競技を行うもので、分団ごとに集計して最も点数の多い分団を郡の、ついで県団長が表彰するという仕組みだった。

②　次に青少年団の性格として無視できないのは、青年学校との関係である。全国的な運動に青少年団を動員する場合、彼らが青年学校の生徒であれば、相互に連動させる必要が生じる。それ故青少年団独自の運動をも教養訓練と捉えるようになってゆく。また青年団の国防訓練は、皇国民として武力的自衛力を訓練するという目的の下に計画された。

③　青少年団成立後まもなく計画されたのは、軍人援護である。女子青年団は1931（昭和６）年の満州事変以降、大日本連合女子青年団の時代から、毎年軍人援護事業を行ってきたが、当然のこととして、この運動は引き継がれた。

④　青少年団は教養訓練体なので、健全娯楽と教養や訓練が結びついてゆく。機関誌『青年』の普及がこの任務を担っており、毎月カラー頁で室内娯楽を編集し、さらに青年常会では必ず遊戯や演劇や娯楽を加え、映画や紙芝居を見る事を指導した。

⑤　旧青年団の拓殖訓練、海外雄飛の２本柱を継承して、さらなる興亜運動を展開し

ようとの試みがあった。

①から⑤までは、大日本連合女子青年団当時から指導があった。

⑥　今回新たな女子青年独自の運動として、生活訓練の項目が立てられ、宿泊訓練による女子青年団幹部の養成が実施され、また結婚改善が図られた[16]。

3　女子青年団への期待と役割

『大日本青少年団史』によれば、この女子青年の生活訓練は、1942年５月６日に発せられた文部次官の通牒「戦時家庭教育指導に関する件」ではさらに詳しくなる。以下ではその内容を見てみたい。

「戦時生徒教育指導要綱

１、我が国に於ける家の特質の闡明並に其の使命の自覚

２、健全なる家風の樹立

イ 敬神崇祖、ロ 敬愛、親和、礼節、謙譲、ハ 一家和楽、ニ 隣保共和

３、母の教養訓練

イ 国家観念の涵養、ロ 日本婦道の修得、ハ 母の自覚、ニ 科学的教養の向上、ホ 健全なる趣味の涵養、 強健なる母体の錬成

４、子女の薫陶養護

イ 皇国民たる信念の啓培、ロ 剛健なる精神の鍛練、ハ 醇乎たる情操の薫治、ニ 良き躾、ホ 身体の養護鍛練

５、家庭生活の刷新充実

イ 時局認識、ロ 家庭経済の国策への協力、ハ 家生活に於ける科学の活用、ニ 家族皆労、ホ 隣保相扶、ヘ 国防訓練、ト 家庭娯楽の振興」

これを受けて、地方団では女子戦時生活指導者錬成会が計画され、以下のような講習科目が設定された。

１、女子の体力錬成　女子体育の理念と実際、休養と和楽

２、栄養　戦時下の栄養

３、結核　結核の概念、結核予防

４、育児の問題　乳幼児の栄養、乳幼児の疾病、乳幼児の保護

５、母性保護　母性保護、勤労婦人と疾病、我が国の人口問題及び優性問題

６、戦時家庭生活の合理化　家庭生活概論、家庭管理、衣食住の合理化

女子青年団の戦時下での重要な任務は、男子と共に食糧飼料の増産、木炭木灰の増産、軍人援護、興亜運動及び防空防災訓練とされていたため、こうした日常生活訓練の指導がなされたのだ。さらに10月２日になると、加えて戦時栄養食指導者講習会が通牒された。

また女子青年には国土防衛の重任も担当させるべく、大東亜戦争勃発後、各道府県で防災防空に関する錬成会として講義と実地訓練が開催された。

さらに将来の女性に必要と認められる運動機能の習得・錬磨を目指して、女子の体力章検定標準が設定され、健康な母体の養成、運動は女性特有の鍛練で、軀幹の発達に力を注ぐ、身体の柔軟性・敏捷性・巧緻性の涵養、日常生活に必須の能力の養成が計られ、1000メートル歩及び走、縄跳び、短棒投げ、50メートル運搬、体操の5科目に水泳と競歩が選択として設定され、それぞれ上級、中級、初級、級外のレベルに分けられた。対象は15歳以上21歳未満の女子とされた。

1942年４月６日に「都市女子青年勤労奉仕選出実施要項」が制定され、全国の都市女子青年２万人余りが動員された。また各地では農繁期における共同炊事が説かれていった(17)。

以上見てきたように、大日本青少年団への期待は、高度国防国家体制の確立の要請に即応して、青少年の教養訓練の一層の強化を目的としていた。その中でも女子青年団員への期待は、「戦時家庭教育指導」にあるように、家風の樹立、母の教養、子女の薫陶養護、家庭生活、そして結婚の改善であり、そのために生活指導のための講習会まで開かれていた。こうした内容を伴う国家からの要請は、必然的に雑誌にも反映されてくる。

そこでこうした状況をふまえて、女子青年向けの雑誌の成立事情とその変遷を見てゆくことにしよう。

第３章　女子青年向けの雑誌の比較

ここでは雑誌がどのような意図でどのような人々を対象として編集発行されていたのか、『処女の友』創刊号と『青年（女子版）』第26巻創刊号（10月号）の内容見本からみてみよう。そしてこれらの雑誌とは全く別の、都市の少女向けに出版された雑誌を、比較の意味で取り上げてみたい。それによってここで取り上げた雑誌の性格もはっきりしてくるからである。

⑴　雑誌『処女の友』(18)

雑誌『処女の友』の創刊は1918（大正７）年11月10日で、発行は処女会中央部、編

集人は天野藤雄である。定価は13銭だった。

表紙は「収穫の歓び満てる田園の処女」と題した田代紫紅筆、理事の跡見花蹊の題字で、絵は着物の労働着姿で手ぬぐいをかぶり、たすき掛けの若い女性が刈り取った稲束を抱える構図である。初めの２頁は「婦女新聞」と『青年団及び処女会』の案内書が掲載されている。目次の次に処女会中央部の会則が載り、第４条には、本部の目的を達するために雑誌『処女の友』を発行すると謳っている。

処女会中央部発行の雑誌
『処女の友』創刊号1918年

口絵では処女会中央部婦人理事８名と、次頁には地方処女会の活動と題して福井県と愛知県の処女会のメンバーの写真が紹介され、処女会中央部の名前で、「『処女の友』の主張」が以下のように載る。

「地方処女会の相互連絡を図り、その擁護機関として、地方処女会の修得を奨め、働妻健母に必須の素養を授け、児童の擁護、故老の敬重、家庭の改善に適切な訓練を施し、郷土の繁栄を期し、都会と農村の実情を攻覈し、その調和発達を計り、処女の処世に活用し、特に田園婦人の自重自覚を奨め、愛郷土着心を涵養し、安心立命の境地を開拓し、国運発展の根幹を培う事を目的とする。」

雑誌『処女の友』創刊号の
グラビアを飾った処女会
中央部婦人理事の８人

ここからは農村の田園婦人である処女が読者対象とされ、素養を身につけ、自覚を持って国運発展に努めるようにと促している事が見えてくる。また主張の文中にある「働妻健母」は、前述のように処女会設立に尽力した天野藤雄が用いており、農村の自治民に対応する用語として描かれた[19]という。

以下は記事で、「皇后陛下の御坤徳」と題した以下の「かぎりなきみ国の富やこもるらむ　しづがかうこのまゆのうちにも」という皇后の歌が載り、養蚕に心を砕き、農民の心労に配慮している姿を紹介している。婦人の鑑でもある皇后の恩に報いるように、農村女性に理解のある皇后の姿を伝えて、それに従うようにと促している。

皇族のお言葉やその姿によって、若い人々を意図する方向に導こうとする姿勢は、男女青年団育成事業にも現れている。

次の「処女会員諸嬢への挨拶」では、「なつかしき地方処女会員の方々、皆様のため

に、処女会中央部は、今度『処女の友』を出すことになりました。」という文言から始まり、田舎に縁があって東京に住んでいる者が、田舎にいる人たちの相談相手としてこの雑誌ができたこと、東京から出たこれまでの婦人雑誌は高尚すぎて田舎の実情にあわないため、この雑誌ができたこと、田舎にいてはわからない遠いところや東京の様子をわかるようにすること、町の様子や世渡りの道しるべとなること、田舎は樹の根のように国家の根幹であること、青年会は処女会の兄であること、等が述べられている。

ここからは読者対象が、高尚な婦人雑誌にはなじまない、田舎に住む若い女性であることがはっきりと見える。

次の「処女会中央部ができてから今日まで」では、その経過、発会式の模様、内務大臣の祝辞、文部大臣の祝辞、会員が70万人であること、中央部の役割が紹介されている。わざわざ大臣の祝辞の内容を載せるなど、国家とのつながりの中で処女会ができたことが強調されている。

次からは記銘記事で、法農学博士・処女会中央部顧問の新渡戸稲造による「処女会及指導者のために」と題して、昔は婦人が外出したり大勢集まると悪いことに出会うなどと、女を誤解していた。力を落とさず何処までも、妄りに会を脱するな、指導者も心がけよ、等が述べられている。なおこの論文には「先生のお話の要点」として内容の要約があり、読者対象である農村の女性たちが理解しやすいように心配りがある。

内務書記官の丸山鶴吉による「20万人の東京の貧民」では、あこがれの東京には20万人の哀れな貧民がおり、中でも木賃宿を泊まり歩く貧民が２万人以上ある。地方の人は都会の暗黒面を十分に知って、むやみに都会にあこがれを抱いてはいけない。東京の事情をよく理解して、田舎を楽しむ精神を持てば、国家を益することにもつながる。地方への巡回講演や講習会を開設する予定なので、地方婦人も自覚を持って健全に発達するように望む、と結ぶ。

むやみに都会にあこがれを抱かず、地方にしっかりと根を下ろして、地方の生活に自覚を持つようにと、若者に都会への憧れを諫めている。

理事の山脇房子は「境遇に満足して」として、他人を羨まず、幸・不幸は心の持ちようであること、身分相応な生活が第一、行くべき道はたくさんある、処女会もお国のためになるから、現在の境遇に満足してまじめに働き、将来の基礎を作るようにと諭している。

理事の三輪田真佐子は「処女時代から能く働くこと」は人間の本務であること、処女の内から修養すること、怠慢は国家の損失になることを述べて、人のため、国のために貢献する心がけを持つようにと促している。

理事の吉岡弥生は「農村処女の衛生」として、健康に必要な四つの条件や、月経時の注意など、専門家の立場から注意を促している。また処女衛生欄を設けるので、質問があれば本紙上で答えると「注記」がある。

次からは砕けた内容で、「処女会の歌」として兵庫県城崎郡長井村処女会の歌が載る。

また「勇ましい仏蘭西の処女」と題した小論で、パリのある娘が爆裂団で足を一本無くしたが、このことを「お母さん泣いてくださるな、私はお国のために足を一本献上したんですもの」と述べた。皆さんはこの話をなんと思いますか、と結んでおり、身を挺して国家に尽くした例が挙がる。

次は徳富猪一郎の「都会と田舎」という詩を載せ、今後、毎号名高い方の文章を掲載するので、読本をお稽古するつもりで繰り返し読むようにと注意書きがある。また詩の上段に難しい漢字の意味が解説されている。これらの詩を読むことで読書の習慣と教養をつけさせようとの意図が見える。

内務省嘱託医学士の黒澤良臣は「なぜ酒を飲むと害があるか」として、女性の力を借りて男子の酒を止めさせたいとして、酒の害を述べている。

この後は格言の解説文、また家庭欄では、「メリンス古夏袖の利用」方法の図解入り解説、「お料理」として、煮出しの取り方三種、季節料理法六種、食物の貯蔵法、通俗科学講話、家庭農事が載る。「日本国号の起源」と題する記事では、国号が「大八洲」「倭」「日本」と変遷した理由の解説がある。

次の「三重県の婦人団と農事改良」では、三重県農会技師の美濃部鏘次郎が、田舎の女は家を治め、夫を助け、家業を助け、立派な働きをする事が尊いと述べている。

理事の天野藤雄は「青年会と処女会（指導者の為に）」として、青年会処女会は兄弟であること、剛柔相依唱和せよ、青年会処女会合同の機運、青年のための処女会等に関してほぼすべて漢文調で語っている。

次の大久保四州の婦人講談「暮れ六つ」は、戦国時代の終わりに、細川忠興の夫人が、大阪方の計略に乗らず、壮烈な死を遂げた話を載せる。

前述の足の一本を国家のために捧げたとするフランスの娘や、この細川忠興夫人の話のような、自分の身をいとわず国家に忠誠を尽くした話が美談として若い女性を対象にした雑誌に載っている。似たような事例が二題もあるのは、この時代の若い娘にこうした忠誠心を盛んに説こうとした意図が認められよう。

続いて諸国子守歌、教訓お伽話「雀の恩返し」、「処女新聞」第１号の論説、田園消息、草鞋の歌、処女と処子、格言、俚謡、嫁の押売（笑話）、懸賞判じ絵、地方通信と投稿募集の記事、編輯便りでは、『処女の友』は、皆様のための雑誌であり、雑誌を読む方は誌友としておつきあい願いたいと結んでいる。

裏に裁縫学院の生徒募集と中央報徳会発行の雑誌『斯民』等の広告が２本ある。

以上見てきたように、『処女の友』は読者対象が本文にある「雀の恩返し」や「子守歌」を好む年齢の少女でもあり、また中等教育に進むことのなかった女子のための雑誌でもあった。しかし難しい漢文熟語を多用した文章を理解できるのか、はなはだ疑問の多い雑誌の出発点と見えた。読者を配慮した雑誌と言うよりも、作り手の意図が先行して始まった雑誌という傾向は否めない。また農村の田園婦人とか或いは田舎にいる人という表現が目立ち、農村に住む若い女子が読者であることが意識され、東京は貧民が多いからむやみに都会にあこがれる事なく、自分たちの地域にいて国家に貢献することを促している。

これは高等女学校に通い、当時威信を持ち始めた西欧文化にも理解があるとされた階層に位置した「少女」たちが読む雑誌とは大きく異なっていた。

⑵　都市の少女が読む雑誌

そこでまず都市の「少女」像の変遷を書いた今田絵里香の分析から見てみよう。今田によれば、少女たちは関東大震災以降に拡大した都市新中間層のライフスタイルの確立と、それに伴って教育を与えられ、慈しまれる存在となっていった[20]。

図2-9　原田齊子「桜花爛漫」（『少女の友』1922年４月号）
図 2-10　画家不明（『少女世界』1930年５月号）
図 2-11　多田北烏「しぶきをあびて」（『少女倶楽部』1931年８月号）

今田絵里香『「少女」の社会史』より
左図　原田齊子「桜花爛漫」（『少女の友』1922年４月号）
中図　画家不明（『少女世界』1930年５月号）
右図　多田北烏「しぶきをあびて」
（『少女倶楽部』1931年８月号）

この当時、日本国内で若い女性向けに発行されていた雑誌の代表的なものは、『少女倶楽部』（1923年の創刊号は67,000部発行）と、『少女の友』（1912年は85,000部発行）であり、読者は女学校に通う中以上の階層の女子だった。雑誌の作りは、宝塚歌劇団や外国映画スターのグラビアを載せ、吉屋信子など当代を代表する作家の少女小説を掲載し、読者は投書・投稿欄を通じて独自の「少女」文化を形成していた。

彼女たちはかつて「少年」というカテゴリーの中に位置づけられていたが、少年が学歴獲得や立身出世に結びつくと、そこから女子は排除されてゆく。そして「少女」が生まれ、雑誌とともに少女文化が形成されてゆく。この少女イメージは中原淳一や竹久夢二などの絵によるヴィジュアルイメージや、雑誌を通してのネットワークによっ

て増幅される。

彼女たちは「少女時代」という特別な期間に、雑誌『少女の友』等を通して、文芸などの芸術の方向へ花を開かせていった。さらに少女は清純な存在として、また純潔であることを意味あることとして機能させた。もちろん少女たちは良妻賢母という規範の中でのみ、充実した女子教育が得られた。そしてそれが職業の獲得手段にならず、結婚するまでという短期間ではあった。それでもこれらの雑誌群は少女たちに自己表現をする場と機会を与え、独自のネットワークさえ築いていた[21]。

今田絵里香『「少女」の社会史』より
左図 高畠華宵「月に弾く」（『少女画報』1930年９月号）
中図 深谷美保子「五月雨」（『少女の友』1931年５月号）
右図 竹久夢二「蝶々と少女」
（『少女の友』1927年４月号）

今田絵里香『「少女」の社会史』より
左図 中原淳一「ヨット」（『少女の友』1936年８月号）
右図 中原淳一「ピアノ」（『少女の友』1936年10月号）

今田絵里香『「少女」の社会史』より
左図 田代光「日の丸立てて」
（『少女倶楽部』1944年11月号）
右図 松田文雄「撃ちてし止まむ」
（『少女の友』1944年３月号）

しかしそうした「少女」像も、農村の女子青年と同様に、時代を経ることで「日本の少女」へと変革を余儀なくされる。

総力戦体制下になると、少女たちは国家に貢献する存在として捉えられ、「日本の少女」像が形成され、国家に帰属してゆく。そしてこの都市新中間層が生み出した少女たちは、産業戦士として国家のために男性に負けない労働をしようとの覚悟があった。しかし少女たちに与えられた任務からは「単調でつまらない」「平凡な事務はつまらない」という嘆きや、工場労働の現場で、女学校卒ではない女工とのハビトウスの違いに、低級で我慢ができないと愕然とする[22]のだ。

⑶　雑誌『青年（女子版）』

ここからは女学校に通う経験を持った少女たちが、ハビトウスが違うと評価した女子青年団員向けに出版された雑誌を見てゆこう。大日本青少年団に統合後の女子青年団の機関誌『青年（女子版）』である。

今回扱うのは雑誌見本である。この号は見本であるが故に、出版する側の意図がはっきりと示されている。これは単体で1941（昭和16）年８月１日に発行[23]された。表紙は女子青年が笑顔でスカーフに手を添えている写真で、脇に巻き尺をおいて雑誌のサイズを示す。表紙に写真が使われているのはこの見本だけで、以降は専門の画家による絵である。

雑誌『青年（女子版）』
創刊号内容見本

広告は化粧品で「明るく健康　素肌を美しく」というキャッチコピーを載せている。

巻頭頁には「輝く興亜女性詩物語－殉国白衣の天使－」と題した看護婦の物語を絵入りで掲載している。内容は従軍看護婦を描いたもので、「１　命美し－竹内美代子看護婦－」では、中支に派遣された竹内が、弾丸降る野辺でますらおに劣らぬまことを示し、コレラをも恐れず看護する姿が描かれる。「３　白衣の楯－松田セツ子看護婦－」では、支那海の病院船で松田は血を吐くほどの船酔いと過労でついに病に倒れ、護国の神と散ったというもので、詩は横澤千秋、画は須藤重だった。

雑誌『青年（女子版）』
右図　広告「明るく健康素肌を美しく」
左図　創刊号を飾った特選グラフ
「輝く興亜女性詩物語」より「殉国白衣の聖天使」

巻頭に護国の神として散った看護婦の物語を掲載して、こうした人物を鑑に、国家に忠誠を尽くす人材に育ってほしいとの意図が見えよう。

左図「輝く興亜女性詩物語」続き
右図「愈々お待ちかねの『青年』女子版発刊!!」

次に記事の内容を見てゆこう。まず「愈々

お待ちかねの『青年』女子版発行!!」と題して、「青年」女子版刊行の意義を、大日本青少年団本部が以下のように説明している。

「一月に大日本青少年団の結成発足に伴い、『女子青年』は９月号で中止、10月号より女子版を全国女子青年諸君のために発行する事となった。

『青年』女子版では全国青少年指導上の方針や時局の解説、女子青年の教養をたかめ、魂をやしない、女子の特性に応じた生活の指導に関する豊かな内容で、全国の団員に送り届けたい。地方で『青年』女子版を中心に団体読書を通じて、教養の向上に努力し、団結を固くしてほしい。『青年』女子版を通して、女子青年の文化活動が活発になる事を希望する。」

これを見ると全国青少年の指導方針と時局の解説、女子青年の教養の向上、女子の特性に応じた生活指導､団体読書を通じての教養の向上と団結を望むというものであった。

「青年女子版の使命」として、大日本青少年団副団長の朝比奈策太郎が「組織化に資する」として、『青年（女子版）』を通して、団体読書と教養の向上、青年団の組織強化、文書教育の使命を女子青年団においても実現したい、とその抱負を述べている。同じく副団長の井上秀が「新しき婦徳の涵養へ」と題して、銃後の青年女子に不足している知識教養を高めること、婦徳を最高度に発揮することを期待すると、巻頭の言を載せている。

次は「これからの結婚にはどんな注意が必要か？結婚改善座談会」というテーマの座談会で、出席者は厚生省予防局優生課長、社会局生活課長、厚生技師人口問題研究所研究官医学博士、東京市結婚相談所心得、桜風会員、大日本青少年団総務部長、文化部長、女子部長などであった。

内容は、国家の政策として、質のよい子をたくさん生んでもらうために結婚改善が必要であること、そのためには生まれてからでは間に合わないので、結婚する者同志の心身の健全が問題となること等がテーマとなっている。

生活面では「農繁期に働きよい簡単な作業服のつくり方」が、簡単な作り方と縫い方の順序を図解入りで解説している。

また「堂々たる十月創刊号の内容」として、傑作小説４本を含む目次を掲載し、目次の最後に「勤労の片手に『青年』女子版を」のキャッチコピーを付けている。

最後に「青年」女子版の申し込み方法を記し、同頁下の段に「機関誌『青年』女子版の使命」として、大日本青少年団員としての自覚を促し、素質と教養の向上を図り、臣道実践に邁往し、輪読会を開くようにと進めている。

雑誌の住所は東京市四谷区明治神宮外苑で、大日本青少年団発行、編輯兼発行印刷

人は田中雅一であった。

考察とまとめ

以上見てきたように、雑誌『処女の友』及び『青年（女子版）』共に、国家の政策の一環として形成された組織である処女会中央部、大日本連合女子青年団、大日本青少年団の変遷と共に、そのあり方も変化してきた。とくに近代日本の女子教育の政策が良妻賢母主義の枠の中で施行され、働かなくては生活ができなかった大多数の女子の位置づけがなされないままだった。それらを踏まえて成立した処女会中央部は、修養の機会を女子にも与えようと意図され、良妻賢母の概念に抵触することなく、将来の公民の配偶者、働妻賢母、銃後女性、国の母を育成するという方針が貫かれた。ここでの処女会会員は、与えられた自分の立場を自覚し、農村での生活に満足し、その中で国家に貢献するようにという方向付けが見られた。

中嶌邦によれば、こうした動きの元となったのが、大正から昭和にかけて国家レベルでの政策的・啓蒙的な運動を中心に展開した生活改善運動であった。その趣旨は、第一次大戦による日本経済の好況により、奢侈に流れる傾向をみたことへの批判、我が国の国際的地位の向上により、名実ともに大国民たることへの要請に基づき、国民の生活改善が急務であること、その実践の役割は家政担当者たる婦人に負うところが大であるとみなされたことだった。この家政を担うべき婦人が国民の生活改善の役割を果たす中心になるとされた。そこで浮かび上がってきたのが女子教育だったが、この時期の女子教育の理念は良妻賢母主義教育であった。さらに第一次大戦を契機に高揚した労働・農民運動、デモクラシー思想や社会主義思想の拡大は、これらに対する取り締まり強化を図らせると同時に、思想善導の積極策を打ち出す必要が痛感された。そこで1919年に文部省普通学務局内に通俗教育担当官を設置し、同10年に社会教育を扱う独立の課が生まれ、官用語としての「社会教育」と改称された。ここに中等教育以上の教育を受ける機会のない人々にも、国家主義教育の浸透を果たすこととなった。特に未婚女性の集団であった処女会を一本化し、全国処女会として再編しようとするなどの行政措置がとられた。こうして女子青年団へと発展する下地が整えられてゆく[(24)]。

その後「未曽有の非常時」に直面し、高度国防国家体制の確立が要請され、それを受けて全ての青少年団体が統轄され、大日本青少年団が成立した。1941年のことであった。ここで注目したいのは、この組織が学生生徒と勤労青少年の差別撤去を意図して、全国青少年を対象にしたことなど、理念は高かったことだ。しかしその実態は、21歳から25歳までの男子青年団員は幹部団員とする規定があるなど、制度的な差別が消えたわけではなかった。

こうした意図の下で青少年に課された期待は、食糧飼料増産、武力的自衛力の訓練、軍人援護事業の継続、教養訓練、興亜運動、そして結婚改善を含む生活訓練であった。

女子にもその使命の自覚を求められ、上記に見合った指導者講習会などが各地で行われた。これらに加えて女子への期待として、家風の樹立、母の教養、子女の薫陶養護、家庭生活、結婚の改善が要請され、その内容は雑誌にも反映されてゆく。

『処女の友』では、田園や農村で生活することそれ自体を良きこととし、その生活環境を良き物として、都会などにあこがれず、現状肯定的な生活がよいという表現が目立っていた。また掲載された講談やフランスの少女の話で、夫のために命を投げ出した話や身体の負傷をいとわず国家に忠誠を尽くした話が美談として取り上げられていた。

しかし『青年（女子版）』では、従軍看護婦として国家のために働いた後に命を落とした話を美談とし、国家のために積極的に貢献すること、組織化に資すること、知識教養を高め、婦徳を高度に発揮することなど、積極的な行動、組織への参加こそが国家への貢献になるなど、女子青年にもより積極的に活動するような促し方がされている。それの典型例が結婚改善座談会であろう。国家の政策として、質のよい子を生むためには、生まれてからでは間に合わないので、結婚する者同士の心身の健全を問題にするのだという発言がある。また女子には国土防衛の重任も担当させるため、運動機能の習得・錬磨も課せられた。まさしく総力戦の一翼を担ってほしいとの期待がみなぎっている内容といっていいであろう。

かつて少女だった都市新中間層に属した女子は、総力戦のさなか、男性の代替えとして、知的労働者となることが期待されてゆく。これは少年・男子に求められた教育主義的な価値観に近づくものとなった。そして「少女」は総力戦にふさわしい労働や戦闘が要求され、国家にふさわしい「日本の少女」へと変容してゆく[25]。

一方、この段階においても、女子青年に期待されたことは、国家に忠誠を尽くすことと同時に、良質な国民を生むことがあった。ここまでは『処女の友』の時代と大きく変わることはない。しかし変わったのは大日本青少年団という大きな枠の中で、女子青年にも青少年団員としての自覚を促し、臣道実践と、教養を高めるために輪読会を開くようにと進めているなど、日本国民としての期待が見えてくる。

次は雑誌『青年（女子版）』が、第二次大戦下でのこの政策を表象していたのか、そして女子青年がどう受け止めていたのかを探ることが目的となるだろう。

（本論は、平成17年度～19年度　日本学術振興会　科学研究費補助金　基盤研究（B）研究課題番号17310154「表象に見る第２次世界大戦下の女性の戦争協力とジェンダー平等に関する国際比較」（研究代表者　加納実紀代）の研究の一部である。）

註

（1）秋津元輝・藤井和佐・渋谷美紀・大石和男・柏尾珠紀『農村ジェンダーー女性と地域の新しいまなざしー』まえがき　昭和堂　2007年

（2）日本青年館編『大日本青少年団史』日本青年館　1970（近代社会教育史料集成４　復刻版1996）。以下、特に注のないものは本資料よりの引用とする

（3）渡邊洋子著『近代日本女子社会教育成立史－処女会の全国組織化と指導思想－』明石書店1997

（4）前掲書３に同

（5）前掲書２に同

（6）前掲書３に同

（7）これは文部省訓令第２号の、大日本青少年団に関する訓令で内容は以下の通りである。
「全青少年を一元的組織の下に結合して、皇国の道に則り国家有為の青少年を訓練するを目的とする」（『学制百年史』資料編　文部省1972）
例えば大日本青少年団の単位団体を大分県の場合で見てみよう。
本部は県庁内に設置、団長は県知事、副団長は学務部長、事務局には総務部・青年部・女子部・少年部があった。単位団体は青年団、女子青年団、少年団で、普通団員は青年学校生徒及び14～20歳の男子。幹部団員は25歳までの男子青年。女子青年団は青年学校生徒及び14～25歳の未婚の女子。少年団は尋常小学校第３学年以上の小学校児童の加入が認められていた。
1941年12月８日「大東亜戦争」始まる。この日、橋田文部大臣は「全国青少年団員に告ぐ」を発表し、「青少年団戦時実践指針」を各地方団長（県知事）宛てに指令。
「一、必勝信念を堅持せよ。
　補足　－死報国の信念を持って国体を護持すべき。
　一、国土防衛に挺身せよ。
　一、職域奉公に邁進せよ。
　一、心身を積極的に鍛錬せよ。」（大分県の事例は大分県公式ホームページより）

（8）『処女の友』、『女子青年』、『女性往来』の現在の時点での保存状態などに関しては、日本青年館調査部掛谷氏調べ（同氏メモより）。記述は前述の『採訪』よりの抜粋。なお掛谷氏によれば、これらの雑誌全てを網羅し、所蔵している機関はないとのことである。
処女会および女子青年団員を対象に作られた雑誌は以下のように数種類ある。
①『処女の友』婦選会館蔵　昭和６年から50冊分
　　日本青年館蔵　大正７年第１巻１号～昭和14年第22巻12号
②『女子青年』日本青年館蔵　昭和14年第７巻11号～昭和16年24巻８号
　昭和５年12月、新聞形式の『女子青年』発行、無料配布
　昭和７年、大日本連合女子青年団本部、機関誌『女子青年』発行
　昭和15年11月、『女子青年（会）』と『処女の友』が合併し、大日本連合女子青年団の機関誌として『女子青年』改題、昭和16年２月第24巻２号より刊行。
③『女子青年会』日本青年館蔵　昭和７年７月18号　発行：大日本連合女子青年団
④『女性往来』日本青年館蔵　昭和10年11月、第３巻12号
　共同機関誌：発行　大日本連合婦人会、女子青年団　『婦人往来』との関わり不明
⑤『青年（女子版）』日本青年館蔵　昭和17年１月～昭和20年２月、第27巻１号～第30巻２号

（9）変遷の全体像は『採訪』６、10、11による（後掲書14参照）

(10) 雑誌『処女の友』創刊号は大正７年11月10日処女会中央部から発行されている。編集人は天野藤雄

(11) この点に関して、加納によれば、「学制」発布当時は男女差はない。「にもかかわらず」女子に対して、男子と同じ水準の教育を与えてこなかったという部分が大切、だという。

(12) 渡邊洋子　前掲書３に同
(13) 渡邊洋子　前掲書３に同
(14) ここで扱う『採訪』という史料は、『大日本青少年団史編纂資料』として日本青年館が（秘）の印を付けて、昭和43年から『大日本青少年団史』作成のために、関係者から聞き取りをしたものである。これは公刊されたものではないが、日本青年館資料室に保管されており、雑誌『青年（女子版）』資料収集に際して、日本青年館から閲覧させていただいた。ここでは女子青年に関する内容及びその関連資料を扱ってゆく。
扱った資料は以下の通りである。
昭和43年８月１日「採訪第６」（秘）処女会・女子青年団及びその機関誌について
（大日本青少年団史編集委員会より）
国立教育会館社会教育協会職員　村田信及び野地吉之助両氏よりの聞き書き調査者　小沢滋
青少年団に統合したときに文部省で発行した女子青年団に関する小沢氏の未定稿「大日本青少年団史」第２章第２節の２項よりの要約。
昭和43年９月「採訪第10」（秘）
女子青年団についての海江田喜次郎氏の手紙（大日本青少年団史編集委員会より）
調査者　小沢滋
野地氏が海江田氏に問い合わせをした返事
編者注：昭和２年４月　大日本聯合女子青年団創立宣言
昭和２年10月　大日本聯合女子青年団発団式並びに第１回大会（於日本青館）
昭和43年９月「採訪第11」（秘）関屋龍吉氏に女子青年団、青年訓練・青年団等について聞く
（大日本青少年団史編集委員会より）
芝公園日本女子会館　出席者　関屋龍吉氏及び野尻丈七氏、女子会館総務部長清水氏、事業部長吉田氏
調査者　龍谷辰治郎、小沢滋、成田久四郎
関屋氏は連合青年団、連合女子青年団、婦人会、青年訓練所等の創設等につき、文部省の普通学務局長として指導力を発揮し、大日本聯合（男・女）青年団の誕生に際し理事に就任するなど、足跡を残している。
編集部：青年団の統合問題は15年９月に発表された。社会教育協会と連合女子青年団が「処女の友」と「女子青年」の統一を図ったのはその後のこと。「女子青年」は青少年団の結成によって、日本青年館に有償移譲され、16年10月から「青年」（女子版）となった。＊以上の話は「大日本連合女子青年団の全貌」昭和17年５月刊　河合佐治編集・発行により補った。
(15) 渡邊洋子　前掲書３に同
(16) 日本青年館編　前掲書２に同　211－375頁
(17) 日本青年館編　前掲書２に同　437－446頁
(18) 雑誌『処女の友』創刊号は日本青年館蔵を用いた
(19) 渡邊洋子　前掲書３に同
(20) 今田絵里香『少女の社会史』勁草書房　2007　１-187頁
(21) 今田絵里香　前掲書20に同　225－231頁
(22) 今田絵里香　前掲書20に同　１-187頁
(23) 雑誌『青年（女子版）』見本は日本青年館蔵を用いた
(24) 中嶌邦「大正期における「生活改善運動」」総合女性史研究会編『日本女性史論集６　女性の暮らしと労働』吉川弘文館　1998　230－263頁
(25) 今田絵里香　前掲書20に同　229－230頁